Heart Beauty Salon

サトリのココロ

多くの人が孤立感、生きにくさを感じる今、
仏教に興味を持つ人が増えています。
僧侶に聞く、弱い自分と向き合う方法――

今日の東京の礎となった彰義隊に思いを馳せて

日蓮宗龍泉寺住職
土田恵敬さん

第80回

つちだ・えきょう　1947年生まれ、東京都出身。立正大学仏教学部から同大大学院へ進学。卒業後、生まれ育った東京・谷中の龍泉寺にて副住職に。2000年より住職。現在は日蓮宗東京都北部布教師会会長を務めている。上野彰義隊百五十回忌墓前法要においては龍泉寺が事務局となり、円成に向けて尽力した。龍泉寺／東京都台東区谷中5-9-26

みなさんは「彰義隊（しょうぎたい）」をご存じでしょうか？　江戸末期、十五代将軍・徳川慶喜公の警護などを目的に結成された部隊で、江戸の治安維持に献身しましたが、1868年7月4日（旧暦5月15日）の上野戦争で新政府軍に敗れました。266名の隊士が亡くなりましたが、その遺体は野ざらしで放置されたといいます。彰義隊は旧幕府軍、賊軍とみなされたためです。その惨状を見かねた隊士の妻・木城花野さんが勝海舟に「屍に賊軍も官軍もないだろう」と訴え、ようやく隊士たちの遺体は荼毘に付されました。

彰義隊は悲運の最期を遂げましたが、慶喜公は無血開城を決断し、そのおかげで江戸の町が無傷で残りました。

まさに現在の東京の礎となったのです。

鎮魂と平和の鐘が鳴り響いた彰義隊百五十回忌墓前法要

それから150年。私が所属する日蓮宗東京都北部宗務所は毎年5月15日に彰義隊の墓前供養を行ってきましたが、節目となる今年は「上野彰義隊百五十回忌墓前法要」として大々的な法要を企画しました。なかでも力を注いだのが梵鐘供養。増上寺、寛永寺、護国寺、瑞輪寺、本門寺と、彰義隊に縁のある5つのお寺で同時に鐘楼を鳴らしました。上野戦争の犠牲者への鎮魂の祈りとともに、明治維新から現代、そして未来への平和の願い……そんな思いを込め、梵鐘が打ち鳴らされました。

最近は彰義隊を知らない人が増えてきました。しかし、彰義隊の存在や無血開城がなければ、東京の街はこんなに復興していなかったかもしれません。私たちが当たり前のように生活している東京の地がそうした歴史の上に成り立っているということを、百五十回忌という節目の年に改めて認識してほしいと願っています。

上／1621年創建の龍泉寺。下・右／毎年5月15日には日蓮宗東京都北部宗務所による墓前供養が行われている。百五十回忌の今年は舞楽奉納や梵鐘供養などが行われた。

生かされた命だから思う「逆境にこそ咲く花あり」

山梨県に七面山という山があります。約2000mの山で、山岳信仰のメッカ。もともと女人禁制の山でしたが、江戸時代に徳川家康公の側室であるお萬の方が家康公の三回忌に七面山に登り、その禁が解かれました。

私はこの七面山に毎年登っています。きっかけは1996年に胃がん手術をしたこと。まだ子どもが小さくて、病気に負けてしまうわけにはいかないと、この神秘の山に登り始めました。それから約20年。彰義隊の百五十回忌法要という大仕事に携わることができた今、私はそのために生かされてきたのかもしれないと思っています。

彰義隊と同じ動乱の幕末を生きた新島八重さんは「逆境にこそ咲く花あり」と言いました。今が逆境でも、10年後にはいいことがあるかもしれません。病気を経て、私自身がしみじみ感じています。

撮影／光川十洋　取材・文／本木頼子　デザイン／黒田志麻